



大雨災害から身を守る知識を

毎年、7月の梅雨末期に近づくと、大雨が原因で河川のはん濫や土砂災害が全国的に発生する。犠牲にならないために、日ごろから必要な知識をもつよう心がけることが大切だ。

たとえば、土砂災害がわが国でもっとも心配な都道府県は広島県、ついで岐阜県。な

発生した。

こうした自然災害で命を落とさないためには自助が求められる。

ふだん経験したことがないような大雨が降り続くとき、まず2階に上がり、裏山や斜面から遠い部屋で寝起きする。大規模な土砂災害でない限り、1階が先に被災する。落石も1階を直撃しやすい。

多い。そこをやられるのである。

一方、市街地では集中豪雨によるはん濫に巻き込まれる人が後を絶たない。ほとんどの自治体では、1時間の雨量が50mmを超えると、マンホールや側溝から道路に雨水があふれてくる。これと前後して、気象台から大雨警報が発令されているはずである。

せなら、風化花崗岩(別名・マサ土)がこれら両県で広く分布しているからである。鹿児島県もシラスという火山灰が堆積している。

これら3つの県のような土壌では、一定量以上の雨が降ると必ずがけ崩れを起すか土石流を発生させる。これらの県では今年も甚大な被害が

土砂災害の犠牲者の90%近くは1階で発生している。平屋の場合は近所の2階建ての家に避難させてもらうことがある。

2階は屋根に近い分、雨音がやかましいし、テレビは1階の茶の間にあることが多い。夜中にトイレに行くとき、階段は危険だ。だから、ふだんは1階で過ごすことが

このときすでにガード下やくぼ地などの低地は浸水していると考えなければならぬ。そこを車で通りかかると、車は浮き上がり、運転速度が速いほど、勢いがついて

るので、深いところに運ばれてしまい、水没する危険がある。大雨が降っているときは、低速で慎重に運転することが肝心である。

また、すでに市街地でははん濫が起っている場合、遠い避難所に避難するのは危険である。次善の策として(最善は、はん濫前に指定避難所に避難することである)やはり2階に避難するのがよい。いったん市街地でははん濫が起ると、どこに深みがあるかわからないし、まして流れの中を歩くという経験はあまりないはずだ。マンホールのふたが逆流で外れていても、濁流ではわからない。夜はとくに危険だ。昨年の兵庫県佐用町の犠牲者の大半は夜間の屋外で亡くなっていることを忘れないでほしい。

最近、とくに高齢犠牲者が増える一方である。災害時に要援護者を地域で守る仕組み作りが必要であり、喫緊の課題である。
(河田恵昭・関西大学社会安全学部長)